

半導体漫遊記

湯之上隆

(245)

プロセッサメーカーのチャンピオンである米インテルは2016年、10nmプロセッサの立上に失敗した。その後、インテルは何度も「今度こそ10nmが立ち上がる」という発表を繰り返してきたが、現在に至るまで、それは実現しなかった。そのため15年以降、14nmプロセッサを延命し続けている。

GPUの代替生産にTSMCの5nmを、それぞれ予約していると見られる」という記事も出てきた(大原雄介、Tech Faculty、20年8月5日)。20年8月5日、AMDの代替生産にTSMCの5nmを、それぞれ予約していると見られる」という記事も出てきた(大原雄介、Tech Faculty、20年8月5日)。

インテル、AMD対決の本質は ジム・ケラー対ジム・ケラーに

そして、20年第2四半期の決算発表でインテルのボブ・スワンCEOは、7nmプロセッサが1年以上遅延していることを認め「プロセッサ生産の外部委託を検討している」ことを明らかにした。

インテルの公式発表はまだ無いが「既にCPUの代替生産向けにTSMCの6nmを、AMDの快進撃の要因になる。」と分析すると次のようになる。まず、12年にAMDに移籍したIBM出身のリサ・スーが、AppleでiPhone用プロセッサを設計していたジム・ケラーをAMDに呼び戻した。ケラーはZenマイクロアーキテクチャ(以下、「Zen」)を開発した後、16年にAMDのライバルのインテルに移籍した。そして、ケラーが開発したZen、それを基に設計されたRyzenやEPYC、リサ・スーCEOの経営手腕、TSMCの最先端プロセッサがAMDの快進撃を支えている。

ケラーが開発したZen、それを基に設計されたRyzenやEPYC、リサ・スーCEOの経営手腕、TSMCの最先端プロセッサがAMDの快進撃を支えている。さて今後、インテル対AMDの対決はどのような形になるだろうか? もともと、ケラーが18年にAMDのライバルのインテルに移籍した。そして、ケラーが開発したZen、それを基に設計されたRyzenやEPYC、リサ・スーCEOの経営手腕、TSMCの最先端プロセッサがAMDの快進撃を支えている。

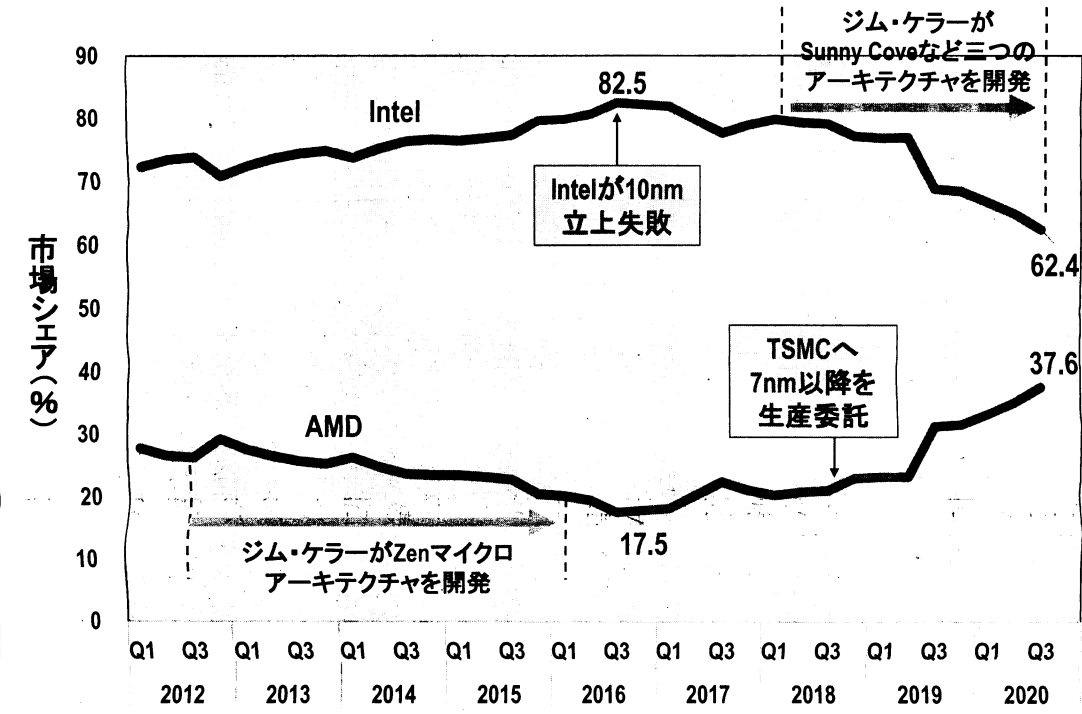


図1 プロセッサの市場シェア(2020年Q3は予測)

出所: PassMark (CPU Benchmark) のデータを基に筆者作成

のCoveを基に、これの企業が開発したZen、それを基に設計されたRyzenやEPYC、リサ・スーCEOの経営手腕、TSMCの最先端プロセッサがAMDの快進撃を支えている。さて今後、インテル対AMDの対決はどのような形になるだろうか? もともと、ケラーが18年にAMDのライバルのインテルに移籍した。そして、ケラーが開発したZen、それを基に設計されたRyzenやEPYC、リサ・スーCEOの経営手腕、TSMCの最先端プロセッサがAMDの快進撃を支えている。